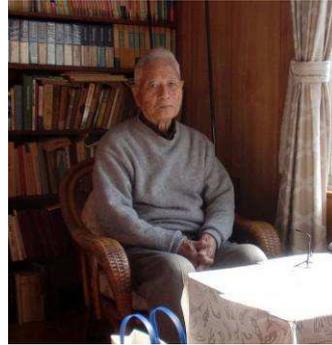


## 昭和の東南海地震体験談

氏名：長田 興之(おさだ ともゆき)  
生年月日：大正 10 年 9 月 20 日  
地震を体験した場所：那智勝浦町宇久井  
当時の家族状況：父、母、姉、弟(2人)、妹



### 1) 地震発生時の状況

当時25歳で、軍隊から病気で帰還したばかりだった。父は漁業を営んでいた。当日、自宅から300m程離れた同じく帰還した友人宅の二階で話をしていて。午後2時頃だったと思うが、地震が揺って来て、二階から道路へ飛び降り、すぐ近くの畑(現在のキリスト教会)へ入った。

そこではおばあさんが畑仕事をしていたようだが、座り込んだままだった。自分たちも立っていることが出来ず、座り込んでしまった。すると家がピューピューとしなげて音を立てた。それは2~3分ほど続いた。

### 2) 津波の襲来時の状況

揺れが治まってから家に帰り、10分位経った頃に「津波やー」と父親が浜の方から、わめいて来た。家は浜から百メートル程離れた高台にあった。走って浜に行ってみると、父親が「舟を引っ張り上げたい」と言って、船首を掴んだら津波の勢いで舟は坂を上がり浜から2メートルほど高い道の上まで押し上げられた。浜の手前上では何人かが津波の状況を見ていた。浜に置いている舟の持ち主であろう。

第1波は大浦さん宅の屋敷の中、畑の半分くらいまで押し寄せ、お稲荷さんの石の鳥居の上まで被さってしまった。父の話では1波のときは波が盛り上がりやって来た。自分が確認出来たのは第2波からで、当時はなかった現在の堤防の所に立って見た。(右写真 稲荷神社の石の鳥居)



2波の時は岸いっぱいまで押し寄せ上がって来たが、一辺、波が引いていくと、沖の赤島と松島が見渡せた。そのあたりから、しゃぶ、しゃぶ、しゃぶ、しゃぶ、と泡だつて来ると、又、押し寄せて来た。波は50mくらいの間隔で押し寄せ、それが何回か繰り返され、ようやく治まった。近所の2歳年上の男性がモイカ(いか)を宇久井湾で舟に乗って捕っていたが津波で、舟は勢いよく岸に寄せられ、引くときにはす一つと沖の西島の辺りまで持って行かれた。再度、津波が来るときに岸に寄せられたが舟から下りることが出来ず、同じことを3~4回繰り返した後、やっと岸につけて陸に上がることができた。

### 3) 家族の行動・被害

2歳の妹が甥(10歳)に連れられ、浜で遊んでいたその時、地震が揺れたので、妹をおぶって家まで逃げてきた。居住地の海拔は、昔からお寺の石段の一番上と同じだと言われていたので、家族は特に避難することもなく、津波での被害もなかった。

### 4) 集落・周囲の被害

地震と津波による家屋の被害は何もなかった。

### 5) 地震・津波後の生活

被害がなかった為、普段通りの生活を送ることができた。鉄道が止まったがどうかは記憶が無い。

### 6) 次の災害への備え

非常食と懐中電灯を用意しているだけで、特に避難することは考えていない。

### 7) その他

1946年の南海地震は、夜中の2時頃寝ているときに地震が揺れたので窓から飛び出した。

津波は来たが小さいもので、たいしたことはなかった。父親が朝4時頃沖へ、えび網を上げに行っていたころ、沖がしゃぶしゃぶ揺すって、船が揺れた。宇久井地区では建築中の家が屋根ごとポトンと落ちたそうである。新宮市内に妻の実家があった。翌日、走って広角の山を越え、市内に入ったら家はまだ燃えており、せいかえんと言うお寺の石垣をつたって、妻の実家まで辿り着いた。その晩、その荷物を速玉神社の境内に移したが、雨が降りだしテントを張る事と成った。街中が焼け野原で、妻の実家も消失してしまった。そのときに残ったのは丹鶴町の講堂(当時の市民会館の前)だけだった。その火災の要因は直接的な地震に因るものではなかったと言う。